

# 途中の建築

- 解体を止めた先の途中式 -



家は、完成された固定物ではなく、日々の営みや交流によって刻々と変化する「途中の建築」だ。新たな命がもたらされることで価値は足し算され、誰かが巣立つことで一部が引き算され、空間が仕切られることでその役割が再構成され、交流が生まれることで新たなつながりが掛け算される。しかし、家が空き家となると、その計算は突如として止まってしまう。完全な解体に至れば、これまで積み重ねられてきた営みはすべてリセットされ、過去は消え去る。一方、何も手を加えなければ、未完の式として家は町に取り残され、成長を続けることはない。だからこそ、解体を途中で止め、これまでの足跡を活かしながら新たな価値を加えることが求められる。家は再び変化を始め、その動きはやがて町全体へと広がり、新たな風景を紡いでいこう。家はまさに「途中式」のような存在であり、その式が続く限り、町の物語もまた尽きることはない。



家は、完成された固定物ではなく、日々の営みや交流によって刻々と変化する『 途中の建築 』



家 = 「 途中式 」





## 『 途中式 』が止まった空き家

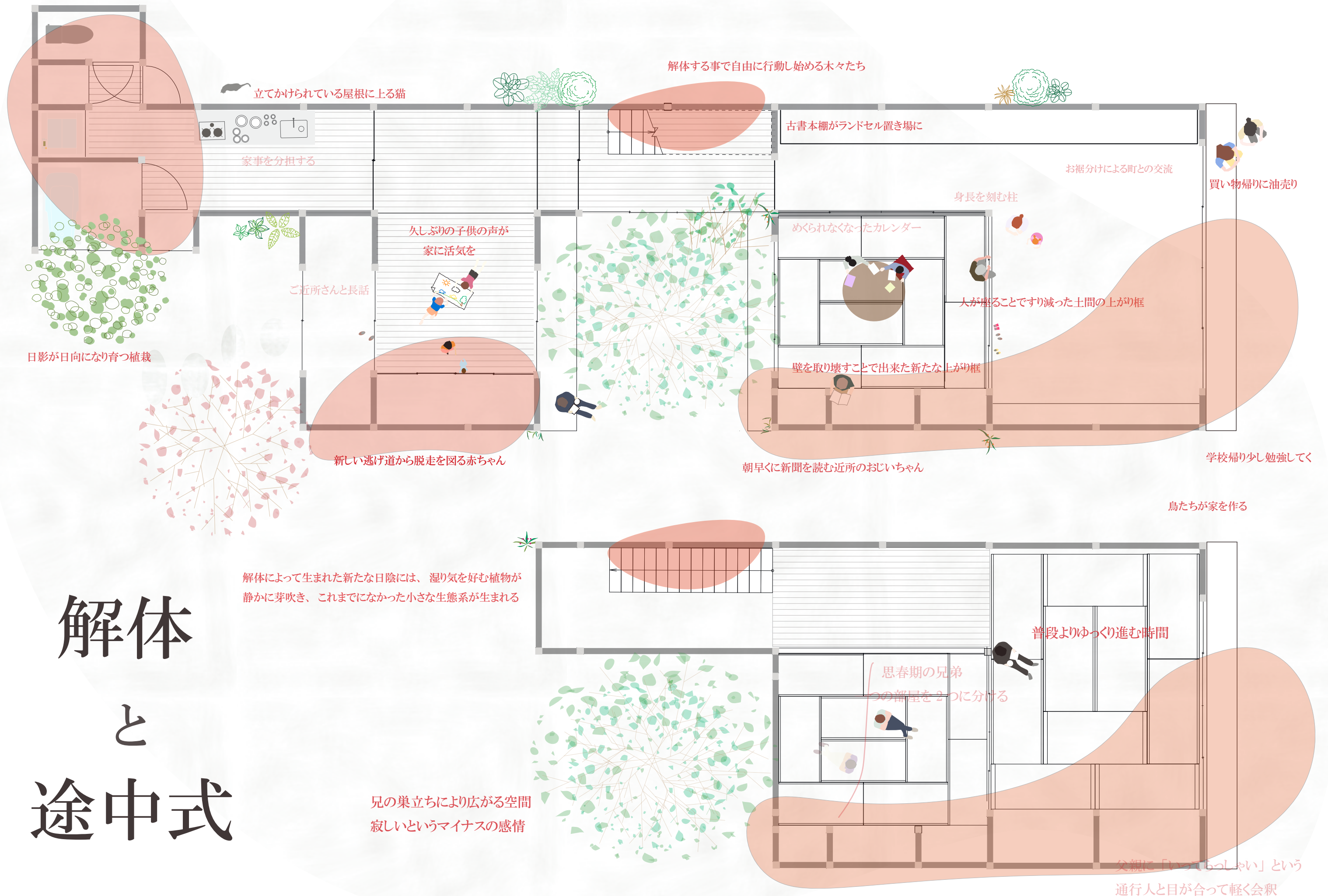
完成した模型をあえて壊すことで、その家に住んでいた人が「自分の家が壊される」という体験を、疑似的に感じ取ることができる  
ただの模型以上に、そこにあった生活や記憶に気づかされ、住まいへの愛着や喪失感をリアルに想像するきっかけになる

## 解体を『 途中 』で止める

解体を途中で止めるという選択は、過去の記憶を残しながら新たな価値を吹き込む行為だ。この手法は今回の建物だけでなく、どんな空き家にも応用できる。壁や柱を開放することで想像もしなかった使い方が生まれ、失われるはずだった空間が町の新たな風景へと息を吹き返す。まさに、途中式を動かし始める力がそこにある



# 解体 と 途中式















扉が外れ、家と町がゆるやかに繋がることで、思いがけない交流の場が生まれる。学校帰りの子どもが宿題を見てもらい、通りすがりの大人が話し相手になる。そんな時間が、町と家をつなぐ一つの風景として溶け合わせていく





「土間での交流の証として角が丸くなった上がり框」や「子供の成長を刻んだ柱」









壁を取り壊すことで、家の動線に新たな選択肢が生まれ、限られた通路が多様なルートに変化する。これにより、人々は新たな空間利用法や生活スタイルを発見できるようになる。





解体が光を招き、影を生み、新たな色彩を刻む









解体は一見マイナスな行為に思えるが、人間中心の視点を動植物の世界へ移すと、むしろプラスの要素となり得る。例えば、取り壊された建物の跡地が自然再生や生態系の多様性を育む場となり、新たな命が芽吹く土壌へと変わる可能性がある。



無作為な解体でも、計画的な解体でもいい。『解体を途中で止める』という行為そのものが、町や家に新たな風を吹き込み、停滞していた風景や関係性に変化をもたらす。壊すことで「途中式」が動き出し、そこにあったものとこれから生まれるものの間に、新しい物語が流れ始める



これからの建築は、完成された美しい形だけではなく、

“途中過程に生まれる無数の出会いや変化”を大切にしていくべきである



途中の建築  
～ 解体を止めた先の途中式 ～

齋藤 敬太